

学芸員課程履修学生の常識度

—教員が示すべき知識軸—

宇仁 義和

はじめに

近代博物館の成立を支えた要因のひとつは、世界と自然に関する秩序だった知識体系である。学芸員を目指す学生は、このような知識構造を体得していくことが求められる。

しかしながら、大学生の学力レベルの低下や常識の欠如が嘆かれるようになって久しい。実際、2006 年から大学の教壇に立ってみて感じることは、漢字や英語が読めない、人物や生物の名前を知らない、頭のなかに年表や地図が描けていない、という印象を強く受けている。固有名詞や概念語をひとつ話すたびに、通じているかどうか不安になる。学生の知識の欠如は、学力というより常識の欠如に近いのだろう。しかしながら、学芸員養成課程の学生の知識レベルがどの程度なのか、具体的なところを明らかにした事例はあまり見られない。

そこで、日々の生活や世間話レベルの知識を常識テストとして実施することを考えた。

目的

学芸員養成課程の履修学生の知識量はどの程度なのかを「常識テスト」によって推し量り、大学での授業の出発点、あるいは学生に示すべき知識軸を考える参考資料とすることを目的とした。本論では常識についての正確な定義は行わないが、全国紙をくまなく理解できる知識というのは、世間話というより高度な知識とすべきだろう。同様に、高校教科の知識も相当に高度な知識と判断する。

本論で述べる常識テストの内容はもっと日常的な知識を意味する。高校の履修内容に比べれば大幅に簡単であり、中学校までの義務教育段階での習得知識に相当、あるいはそれ以前の段階である。

材料と方法

常識テストは勤務先で実施した。回答者は北海道網走市にある東京農業大学生物産業学部（オホーツクキャンパス）の学芸員養成課程（学術情報課程）履修生 1 年生 27 名および 2 年生 50 名合計 77 名である。生物産業学部は生物生産学科、アクアバイオ学科、食品科学科（2010 年入学者からは食品香粧学科）、そして文系の産業経営学科の 4 学科からなる。この学部に学芸員養成課程が置かれたのは 2006 年度からで、1 学年あたりの受講者数は 31-64 名と変動があるが、学科別の構成は毎年ほぼ同じで、1/3 が生物生産学科、2/3 がアクアバイオ学科であり、残り 2 学科は若干名である。当学部に関する受験産業算出の偏差値は、代ゼミ合格難易度で各学科 44-50、進研模試難易度では学部全体で 43 となっている。学生は全国から集まり、85%以上が道外の高校の出身（以下、道外出身者）で、実際の回

答者では 90%に達し、道内出身者 77 名のうち 7 名（9%）であった。

回答した学生の生まれ年は 1988-1992 年で、1988 年生まれば 1 名、1989 年は 3 名で、大半は 1990-1992 年に生まれている。この大半を占める世代は小学校入学時から学校週 5 日制であり、総合学習の授業を受けてきた「ゆとり世代」である。

テストは通常の授業時間に実施し、1 年生は 2010 年 9 月 21 日の博物館概論、2 年生は 9 月 21 日に博物館情報論の時間を利用した。回答時間は 20 分を予定していたが、25 分に延長した。テストの内容は、表面には動物、人類、アイヌ文化に関する問を三択方式で各 3 問計 9 問、できごとの発生年、アルファベットによる略号、植物の科名を記述する問を各 5 問計 15 問を設け（図 1）、裏面はヨーロッパとアジアの白地図を示し、図中に番号を与えた場所の国名と首都名を記載する内容とした（図 2）。成績に無関係なテストであることを伝えたが、不真面目な回答を防ぐために「学科に結果を伝える場合がある」と注意し、テスト用紙の冒頭にも明記した。

なお、設問は常識的な知識を調べることが目的である。高校生にとってなじみのある語を用いた結果、設問には学術的に見て不適切な表現が含まれる。たとえば「縄文文化」とすべきであるが、学生が慣れ親しんだ表現として「縄文時代」を用いている。

結果

テストの結果は表 1-3 のとおりである。三択問題は細枠で囲った番号が正解、太枠は興味深いと考えた回答や回答傾向である。1 年生と 2 年生の解答内容はほぼ同様であり正答率は合算して集計した。学年によって明かな違いが見られた設問は後述する。以下、回答傾向に対して若干の分析を述べる。

1) 三択問題

・動物

問の内容は、恐竜と人類が共生していた時代の有無、恐竜の綱レベルでの分類、哺乳類の祖先、の 3 つである。

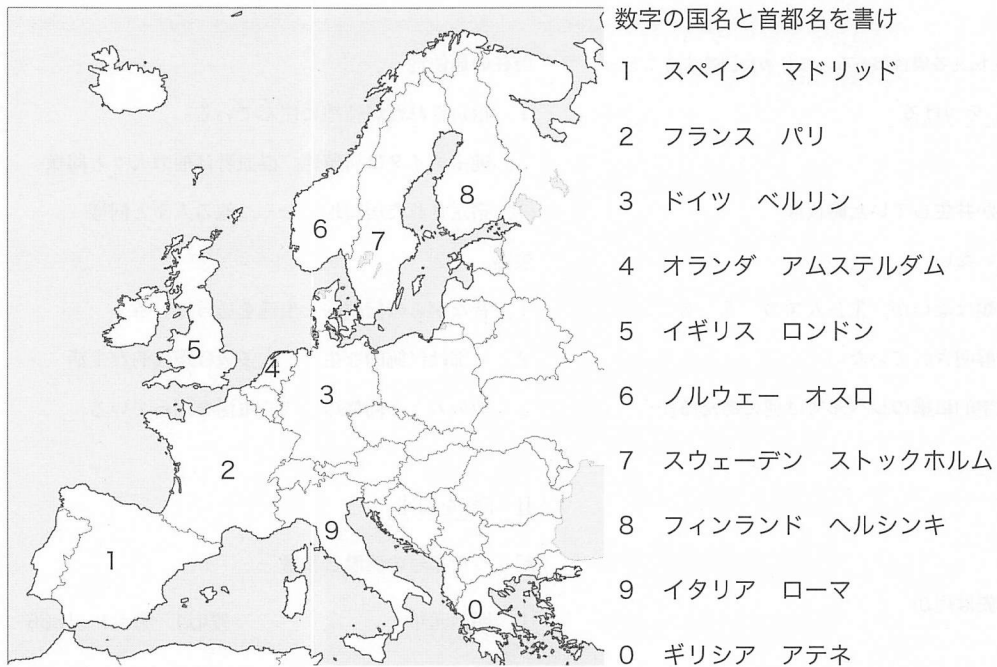
最初の問題で、6500 万年前に絶滅した恐竜と化石人類の一部が共生していたという回答が 14 名（18.2%）、いまだ解明されていないが 13 名（16.9%）いたことに驚いてはいけない。博物館を訪れた親子連れが常設展示室にある生命の進化あるいは全地球史を 1 枚に描いた絵を前にして、昔の人たちは恐竜がいて大変だったんだよと子どもに教えていたという話がある。博物館関係者であれば、ある程度の理解を前提に描いた説明用の図や絵が、そのまま受け取られて誤った知識や印象を与えることがあると反省しなければならない。

哺乳類の直接の祖先は高校までの教科書では爬虫類になっているが、現在の知識では哺乳類と爬虫類とはそれぞれ別個に両生類から進化したとされている。正答率が意外に高いのは、設問があいまいで、直近の祖先を回答させる予定であったが、迷った結果、遠い祖先として両生類を回答した場合もあったと想像される。哺乳類の祖先は両生類であるというのは、2 年生は 6 月に行なった博物館の見学時に先方の学芸員から話を聞いている。しかし、1 年生の正答率は 55.6%、2 年生 54.0%で学年による差は見られなかった。

恐竜の分類については諸説あるが、質問の意図は現在の分類体系ではどこに位置付けられるかということである。じつは、水族館で館務実習をしたいという学生が「恐竜って爬虫類

学科	学籍番号	氏名
学科に結果を伝える場合がある。まじめに回答すること。		
I 正解に○をつける		
○動物		
恐竜と人類が共生していた時代は		
①. いっさいない		
2. 現生人類はないが、化石人類の一部にあった		
3. いまだ解明されていない		
恐竜は分類学的に綱のレベルでは何にあたるか		
①. 爬虫類		
2. 恐竜類		
3. 鳥類		
哺乳類の祖先は何か		
①. 両生類		
2. 爬虫類		
3. 鳥類		
○人類		
ヨーロッパの新石器時代とは日本ではどれにあたるか		
1. 旧石器時代		
②. 縄文時代		
3. 日本に新石器時代はない		
網走近郊の遺跡で最も古いものの年代		
1. 2万年前		
2. 20万年前		
3. 200万年前		
弥生文化を特徴付ける生活様式		
1. 狩猟採集		
②. 水田耕作		
3. 加工貿易		
○アイヌ		
現在の日常的な使用言語		
1. アイヌ語		
2. アイヌ語と日本語が入り交じったクレオール		
③. 日本語		
現在の居住地		
1. 指定された居留地に住んでいる		
2. 純系アイヌは居留地、混血者は他の人々と同様		
③. 指定された居留地はなく、他の人々と同様		
生活		
1. 昔ながらの伝統的な生活を送っている		
2. 一部は伝統的な生活、大多数は現代的な生活		
③. 他の人々と同様の現代的生活を送っている		
II 正解を記述		
起こった年号の西暦と和暦		
1. 明治元年	慶応4/明治1	1868
2. フランス革命	天明9/寛政1	1789
3. アポロ11号月着陸	昭和44	1969
4. 太平洋戦争の開始年	昭和16	1941
5. 日韓併合	明治43	1910
アルファベットによる略号		
1. アメリカ合衆国	USA	
2. グレートブリテン及び		
北アイルランド連合王国	UK	
3. ヨーロッパ連合	EU	
4. 国際連合	UN	
5. 全日本空輸	ANA	
種の科名		
1. サクラ	バラ科	
2. チューリップ	ユリ科	
3. タンポポ	キク科	
4. キャベツ	アブラナ科	
5. ニンジン	セリ科	

図1. 常識テスト（表面） 本図では回答も示している。



- | | |
|---------------|-----------------|
| ① インド ニューデリー | ⑥ マレーシア クアラルンプル |
| ② タイ バンコク | ⑦ インドネシア ジャカルタ |
| ③ カンボジア プノンペン | ⑧ ネパール カトマンズ |
| ④ ベトナム ハノイ | ⑨ フィリピン マニラ |
| ⑤ 中華人民共和国 北京 | ⑩ オーストラリア キャンベラ |

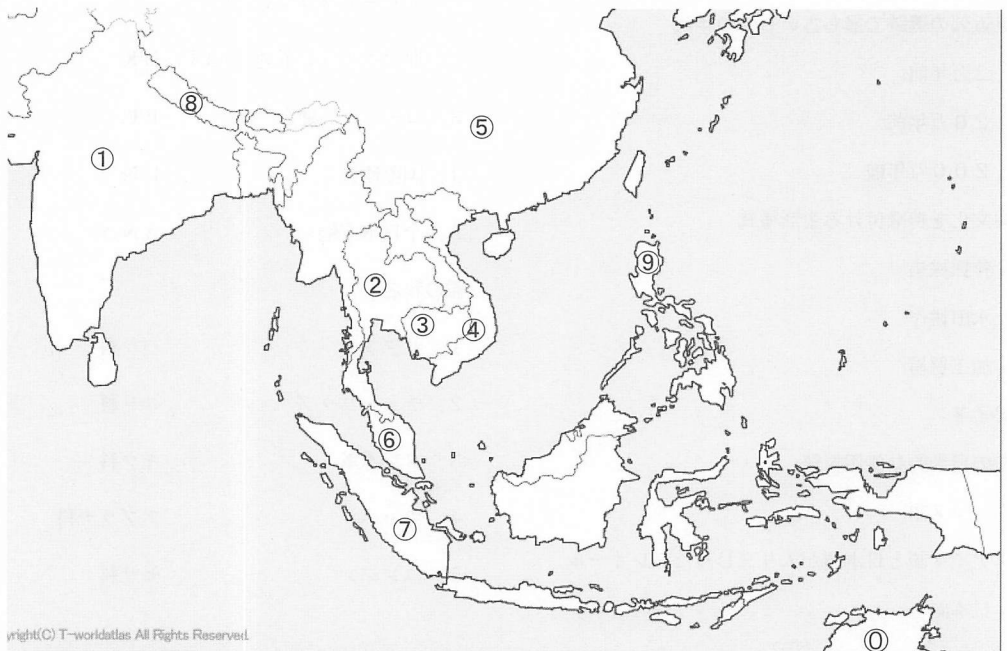


図2. 常識テスト（裏面）

なんですか」と真顔で聞いてきたことがある。「恐竜は恐竜と思っていました」と言う。これは単純な無知ではない。自然の姿と人為的な枠組みの区別ができていないことが、この発言の根底にあると考える。

・人類

設問は、ヨーロッパの新石器時代とは日本ではどれにあたるか、網走近郊の遺跡で最も古いものの年代、弥生文化を特徴付ける生活様式の3つである。

最初の問は、縄文時代は鉄を用いない石器時代であると認識しているかどうかを確認することが目的である。学校では、縄文時代は土器の使用、弥生時代は水田耕作と鉄の渡来が強調される。論理的に考えれば、この2つの教授内容から縄文時代は石器時代であるということが導かれるが、土器の時代の印象が強いと石器時代であるという知識が定着しないのかも知れない。「網走近郊の遺跡で最も古いものの年代」は、石器のねつ造事件のいきさつを知っていれば、世間話等から得られる知識である。しかし、20歳前後の若い学生である。多くは新聞を読まず、年長者との世間話が無く、教科書に載っていない常識はわからないままになってしまうのではないか。弥生時代の生活様式についての問は、選択肢から正答が見えやすかったために、正答率が高くなったと考える。

・アイヌ

質問の内容は、現在の日常的な使用言語、現在の居住地、生活の3つである。最後の設問に「現在の」が抜け落ちているが、選択肢から意味は通じるものと判断した（この常識も通用しないかもしれないが）。

日常的な使用言語について19人（24.7%）が「アイヌ語と日本語が入り交じったクレオール」と回答している。学生が「クレオール」の意味を理解しているとは思えないので、もっともらしい回答を選択しただけかも知れない。居住地については正答率が他に比べてやや高いが、たとえば選択肢を「申請すれば居留地以外にも住むことができる」とすれば誤った回答の選択者が増えたかも知れない。最も正答率が低かったのが「生活」である。「一部は伝統的な生活」という選択肢をもっともらしく感じたのか、メディアでは儀礼の時の伝統衣装での紹介が多いことからの誤解なのかは不明である。

道内出身者に注目すると、7名の道内出身者のうち3問全問正解者は2名（29%）で、各設問の正答率は言語4名（57%）、居住地7名（100%）、生活4名（57%）であった。各設問の正答率は道外出身者と差は見られない。全問正解者の割合は、回答者全員では18名（23%）、道外出身者16名（23%）、道内出身者2名（29%）であり、差は見られなかった。

全体をとおして注意すべきは、各設問の正答率は46-85%だが、全問正解者は2割余りしかないことである。アイヌの人たちの現在の言語と居住地、生活といった基本事項についても、現在の学生にとっては常識的な知識として共有されていない可能性が高い。

2) 記述問題

・起こった年号の西暦と和暦

設問は、明治元年、フランス革命、アポロ11号月面着陸、太平洋戦争の開始年、日韓併合である。この学部は私立理系であるためか、歴史分野は正答率が極端に低かった。白紙回答が28名36.4%もあり、和暦での回答は皆無、明治元年の正解者はゼロ、アポロ11号月着陸が4名（5.2%）、太平洋戦争の開始年が3名（3.9%）、テスト実施時の2010年に100年

となる日韓併合に至っては1名(1.3%)という結果となった。

回答した学生は1990年前後に生まれている。つまりは1980年代以前は十把ひとかけらで「むかし」なのだろう。アポロ11号の月面着陸の回答に1983・1991・1999年、日韓併合に1954・1965年といった回答が見られるのは、平成生まれの学生には戦前戦後といった区別、1945年を画期として見る歴史観が失われている証拠ではないだろうか。一方、フランス革命は少数ながら8名(10.4%)が正解しており、全員が2年生である。授業ではフランス革命を近代博物館の重要事項と位置付け、繰り返し口にしており、年号も覚えやすい「いち・なな・はち・きゅう、だ」と言っているので一部の学生には定着したと考えたい。

・アルファベットによる略号

問の内容は、アメリカ合衆国、グレートブリテン及び北アイルランド連合王国、ヨーロッパ連合、国際連合、全日本空輸のアルファベットによる略号を求めるものである。

予想どおり、アメリカ合衆国の正答率が高かったが(73人94.8%)、それ以上にヨーロッパ連合の認知度が高いことに驚かされた(75人97.4%)。逆に国際連合の正解者は6名(7.8%)とその低さが際だっている。学生がニュースや新聞に親しんでいるとは思えないが、国内では国際連合の報道頻度が低いことが影響しているのだろう。別の理由は、日本語の情報源ではEUは使用されるがUNは通常使われないことにあとと予想できる。回答学生は英語が不得意なものがほとんどだが、苦手な英語でも数字と略号は理解の手掛かりになりやすいので、アルファベット略号はもっと授業で使っていくべきだろう。

設問に全日本空輸を含めたのは、ほとんどの学生が帰省などで航空路を利用していると予想され、遊び心もあつてのことである。しかし結果は正答率が予想以上に低く24名(31.2%)にとどまった。その反面、JALと答えた学生が半数以上(41名53.2%)に昇ったのには驚かされた。連日の経営危機の報道は認知度の向上に役立っており、全日空は相対的に広報不足になっているということだろう。

・種の科名

内容は、サクラ、チューリップ、タンポポ、キャベツ、ニンジンといった身近な植物の科名を答えるものである。回答結果は筆者にしてみれば落胆の大きいものであった。回答者は私立大学では最も伝統ある農業大学の学生である。にもかかわらず白紙回答が32名(41.6%)、全体の平均点は0.9、正解が1問に達しない。この間は、表面末尾の問題なので、回答意欲が低下したこともあるかも知れないが、白紙回答者でも裏面の問題には記入しているので、記入の少なさは意欲低減だけでは説明がつかず、実際に知らないと考えられる。

注目されるのは、9名いる農業高校出身者の平均点が3.0と高く、また全問正解者3名のうち1名、4問正解者5名のうち2名を占めていることである(残りの4問正解者のうち1名は水産高校出身者)。農業高校出身者は、実技教育の知識が定着している学生が多い傾向にあるのだろう。

大学の看板がどうであれ、学科の実際の研究内容は生命工学や食品加工、海洋科学や経営なのかも知れない。しかし、世間には農業大学の看板を背負った学生は、庭の花や野菜の分類くらいは知っていて欲しい。

3) 世界地理

テスト裏面は、白地図を用いてヨーロッパとアジアの国名と首都名を聞いた。正解とな

る国名は正解順に、ヨーロッパがスペイン、フランス、ドイツ、オランダ、イギリス、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、イタリア、ギリシア、アジアがインド、タイ、カンボジア、ベトナム、中国、マレーシア、インドネシア、ネパール、フィリピン、オーストラリアの各 10 カ国である。

ヨーロッパについて、正答率が 9 割を超えたのはイタリア (72 人 93.5%) とイギリス (70 人 90.9%) だけであり、首都で高かったのはロンドンが 6 割 (49 人 63.6%)、パリとローマが 5 割であった (40 人 51.9%、38 人 49.4%)。教育と経済の成功で名声を得たフィンランドは 15 人 (19.5%)、ヘルシンキに至っては正解者ゼロであった。博物館史上重要なギリシアとオランダは 4 割程度であった (32 人 41.6%、31 人 40.3%)。

アジアではインドと中国が 9 割近くが正解したが (71 人 92.2%、67 人 87.0%)、インドネシアとフィリピンが 5 割程度 (同数の 37 人 48.1%)、残りの国はあやふやという状態である。首都名では北京のみ 5 割に達し (41 人 53.2%)、あとは高くても 10% 台であった。

裏面の地理分野の回答について、国名に比べて首都名の正答率がおしなべて低いのは、認知度が低いことに加えて、問題数が多いため回答意欲が低下した面も少しはあると思われる。

博物館概論や博物館資料論では、近代博物館の成立や事例として、スウェーデンのリンネ、シーボルトが資料を送ったオランダのライデンの博物館、その館長であったテミンクやシュレーゲルといった名前を紹介している。歴史や地理を記憶に定着させるには、地図を思い浮かべるのが効果的と信じているので、学生の地理感覚の不足は心配である。国際化について議論する前に、地球儀と世界地図を眺めることが必要ではないだろうか。

考察

常識テストの回答者は農学系に属する理系の私立大学の学生である。入学試験に含まれない歴史や地理の勉強は熱心ではなかったと想像できるが、常識テストの内容は入試に出題されるような高度な内容ではなく、世間話レベルであるので、入試科目との関連性は結論できない。常識テストの結果から、回答した学生の常識や日常知の欠如事項は以下のようになどまとめられるのではないだろうか。

1. 終戦や戦後といった時代の画期となる年号やできごとがない
2. 自然の姿と人為的な枠組みの区別ができていない
3. 生物や世界に関する知識が体系化されていない

これらは筆者が勤務するキャンパスに固有の事情か、それとも世代に共通の特徴なのか、いまのところ判断する材料を持たない。総合雑誌や大学論の論調からすれば、知識量の多少はあれど世代共通の特徴ではないかと想像している。

○学芸員養成課程で示すべき知識軸

文部科学省は「学芸員養成の充実方策について」¹⁾のなかで「学芸員に求められる専門性」について、資料に関する知識や研究能力、実践技術、そして来館者や地域、住民との意見交換や協働能力をあげている。しかし常識テストの結果からは、現在の学芸員養成課程の受講学生には、ここで示された学芸員の専門性より前に、常識や知的思考の基本を示す必要があると思われる。常識や知的思考の基本をまとめて「知識軸」と呼ぶ。

では、学芸員養成課程の教員は、上述のように学生に欠けている常識や日常知を確保す

るために、どのような知識軸を示せばよいのか。一例として、ここでは実際に授業で使用しているものを、効果とともに示す。

- ・100年単位の画期を繰り返し唱える

近代博物館に関係した歴史感覚を得るために、授業ではおおよそ100年間感覚の画期3つを繰り返し唱えている。それはフランス革命1789年、明治元年1868年、大阪万博1970年の3つである。この3つ、市民社会の到来、日本の近代化、現代日本の始まりととらえ、ヨーロッパの近代博物館（ルーブル美術館）→日本の近代博物館（東京国立博物館）→日本の現代的博物館（国立民族学博物館）という博物館界での画期に結びつけている。

学生への知識の定着度合いは計量していないが、今回の常識テストでフランス革命の年号に正答者が比較的多かったことは、ある程度の定着があったことを示している。

- ・科学的事実とは科学者コミュニティの了解事項ということを徹底する

高校までの理科の教科書の記述の仕方や内容は、自然の姿と人為的な枠組みが区別されずに真実として一方的に与えられる。科学的事実があたかも聖典のようにである。再び恐竜を事例にすると、最近の専門家の解説や図鑑では、恐竜と他の爬虫類とは体制が異なることを強調することが多い。羽毛を持っていたことや恒温動物だった可能性、鳥類がその子孫との記述が目立つ。このような記述を好む専門家は、恐竜が他の爬虫類とは区別されるべき分類群であると主張したいのかも知れない。しかし初学者向けには、自然の姿と人為的な枠組みを区別した上で、現在の知識体系では恐竜は爬虫類に含まれまると書くべきではないか。

大学での勉強で重要事項のひとつが、科学に対する認識を変えることと考える。科学的事実は聖典ではなく、科学者コミュニティの了解事項であると。だからこそ研究者は科学を変えることが可能なのである。

- ・常に日本や世界のなかでの位置付けを考えさせる

レポートでは、課題は与えるが議論の対象は学生自身に対象設定させ、その対象を日本あるいは世界のなかに位置付けしてから本論に入ることが条件にしている。体系的知識の形成には、個別の事案や物件の位置付けを考えることが役立つという判断である。副産物として、インターネット情報をそのまま貼り付けるレポートも、位置付け不足として却下できることもある。

おわりに

今回のテストでは出題しなかったが、授業の経験では、受け持ち学生は祝祭日の意味をほとんど知らない。質問すると、建国記念の日や文化の日の意味や理由がわからない、思わず「何も知らずに生きているなあ」と感心してしまう。学生たちは知らないことが恥ずかしいくないようなので、実利的な面に関心を抱くように、学芸員は話の前置きに祝祭日のいわれをよく使うんだといって説明をしている。学芸員養成課程の受講学生の大半は資格取得が目的であって、博物館での仕事を本気では目指していないことは承知の上である。そうであっても、せめて受講学生には日本の常識を伝えたいと願って授業をしている。今回行なった常識テストの内容を1つも知らなくても、専門科目の勉強や卒業研究にはまったく支障がないのだが。

大学生の知識定着度を調査した報告はいくつか見られるが、多くは高校教科の知識を対

象にしている。本論はそれよりもはるかに常識的な知識を調べた。いわば、家族や親族内での日常的な会話による受け継ぎ、家庭での教育力が反映される内容であった。「ゆとり世代」の学力低下は高校までの学校教育だけに責任があるのではない。本論から見えてきたのは、この世代の家庭における知的な会話の不足、祖父母や年配者からの知恵の受け継ぎの欠如だろう。

日本の常識の再構築は、カレンダーを前にして「今日は何の日？」という家族団らんの会話から始まるのではないだろうか。

(東京農業大学オホーツクキャンパス)

注

¹⁾ これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議 2009「学芸員養成の充実方策について（報告）「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」第2次報告書」

表1. 学芸員養成課程12年生77名への常識テストの回答1

I 三択問題、太枠は注目点として本文で解説した事項

	1	2	3
○動物	回答者数(%)、太枠が正解		
恐竜と人類	49 (63.6)	14 (18.2)	13 (16.9)
恐竜の分類	54 (70.1)	8 (10.4)	15 (19.5)
哺乳類の祖先	42 (54.5)	22 (28.6)	12 (15.6)
○人類			
新石器時代	26 (33.6)	39 (50.6)	12 (15.6)
最古の遺跡	34 (44.2)	29 (37.7)	14 (18.2)
弥生文化	12 (15.6)	65 (84.4)	0 (0.0)
○アイヌ文化			
使用言語	2 (2.6)	19 (24.7)	56 (72.7)
居住地	2 (2.6)	9 (11.7)	66 (85.7)
生活	2 (2.6)	39 (50.6)	36 (46.8)

表2. 学芸員養成課程12年生77名への常識テストの回答2

II 記述問題、太枠は注目点として本文で解説した事項

○西暦と和暦	正答者数(%)	ヨーロッパ連合	75 (97.4)
明治元年	0 (0.0)	国際連合	6 (7.8)
フランス革命	8 (10.4)	全日本空輸	24 (31.2)
アポロ11号月面着陸	4 (5.2)	○種の科名	
太平洋戦争の開始年	3 (3.9)	サクラ	9 (11.7)
日韓併合	1 (1.3)	チューリップ	12 (15.6)
○略号		タンポポ	22 (28.6)
アメリカ合衆国	73 (94.8)	キャベツ	18 (23.4)
グレートブリテン及び		ニンジン	9 (11.7)
北アイルランド連合王国	22 (28.6)		

表 3. 学芸員養成課程 1 2 年生 7 7 名への常識テストの回答 3

III 記述問題、数字は正答者数（％）、太枠は注目点として本文で解説した事項

○国名と首都名（ヨーロッパ）

スペイン	46 (59.7)	マドリッド	16 (20.8)
フランス	60 (77.9)	パリ	40 (51.9)
ドイツ	49 (63.6)	ベルリン	20 (26.0)
オランダ	31 (40.3)	アムステルダム	5 (6.5)
イギリス	70 (90.9)	ロンドン	49 (63.6)
ノルウェー	28 (36.4)	オスロ	3 (3.9)
スウェーデン	28 (36.4)	ストックホルム	6 (7.8)
フィンランド	15 (19.5)	ヘルシンキ	0 (0.0)
イタリア	72 (93.5)	ローマ	38 (49.4)
ギリシア	32 (41.6)	アテネ	21 (27.3)

○国名と首都名（アジア）

インド	71 (92.2)	デリー	12 (15.6)
タイ	28 (36.4)	バンコク	6 (7.8)
カンボジア	10 (13.0)	プノンペン	1 (1.3)
ベトナム	22 (28.6)	ハノイ	5 (6.5)
中国	67 (87.0)	北京	41 (53.2)
マレーシア	23 (29.9)	クアラルンプル	8 (10.4)
インドネシア	37 (48.1)	ジャカルタ	5 (6.5)
ネパール	10 (13.0)	カトマンズ	2 (2.6)
フィリピン	37 (48.1)	マニラ	6 (7.8)
オーストラリア	26 (33.8)	キャンベラ	9 (11.7)